

本学学生に施行した矢田部ギルフォード性格検査の結果の分析と諸考察

明治鍼灸大学 人文科学教室

多田 建治

要旨 : 過去6年間にわたって明治鍼灸大学1年生に施行してきた、矢田部ギルフォード性格検査の結果を集計分析した。そして、学生全体の性格の様態、推移を、また、女子学生の特徴、留年学生の特徴、△の反応の多い人の特徴などを調べた。全体の傾向としては、B型やD型の外向性の人の割合が、少しずつではあるが年次を追って増加しているのがわかった。また、筆者の20年にわたっての、矢田部ギルフォード性格検査を大学生に施行してきた経験から、5類型についての新しい見方を記載した。

I 緒 言

矢田部ギルフォード性格検査(以下、Y-Gテストと略記する)は、心理テストの中で最も代表的なものであり、学校など教育機関で、生徒の大まかな傾向を知るためによく用いられている。Y-Gテストは質問紙法性格テストであり、被験者の内省により、定められた質問に対して、はい、いいえ、?の三者択一の応答をするものであるが、Lie Scale を欠くために被験者の応答態度が判明し難く、自分をよく見せようとする虚偽的態度が出現し易い、そうした欠点に目をつぶれば、Y-Gテストは所要テスト時間も適当であり、簡単に施行でき、誰にでもわかり易い構成となっているバランスのとれたテストだと言うことができる。それゆえ、これまでY-Gテストを用いた様々な研究、調査がなされていて、心理テストとしての必要条件である、信頼性や妥当性も高いテストだと言える。

Y-Gテストの成立ちについては¹⁾²⁾ Guilford, J. P. が Martin, H. G. とともに、1940年~43年

にかけて、従前の向性検査の研究の反省をふまえて、ギルフォード人格目録、ギルフォード・マーチン人格目録、ギルフォード・マーチン人事調査目録の3種の性格テストを考案したことに始まる。これらのテストは合計して、13の尺度から成り、それぞれ400名以上の男女について標準化がなされている。これらを基にして、我が国において、矢田部達郎、園原太郎らが、大規模な標準化を行ない、各々12項目から成る13尺度の性格テストを作成した。それが矢田部ギルフォード性格検査の母体となり、さらに、辻岡美延は、このY-Gテストを各々10項目の質問から成る12の尺度に改めて標準化を行い、1957年に、今日広く施行されているY-Gテストを完成させた。

Y-Gテストは質問紙法テストとしての重要な問題である質問項目の内的整合性の問題を十分に検討して作成されており、質問項目どうしの相関が高く、それらの項目から作った尺度と、ひとつひとつの項目とが高い相関をもつ。また各尺度はそれぞれ独立したもので、この特性尺度の組み合

Key Words : 性格検査 Personality inventory, 5類型 Five personality types, 学生 Students

わせにより、性格の個人差を百人百様に表わすことができる構成となっている。

現行のY-Gテストは次の12の尺度から成り立っている。D：抑うつ性 (Depression), C：回帰性傾向 (Cyclic Tendency), I：劣等感の強いこと (Inferiority Feelings), N：神経質 (Nervousness), O：客観的でないこと (Lack of Objectivity), Co：協調的でないこと (Lack of Cooperativeness), Ag：愛想の悪いこと (Lack of Agreeableness), G：一般的活動性 (General Activity), R：のんきさ (Rhythymia), T：思考的外向 (Thinking Extroversion), A：支配性 (Ascendancy), S：社会的外向 (Social Extroversion) そして、これらの12の尺度の得点からプロフィールが描かれ、プロフィールの型から、5つの性格の類型が判別される。5つの性格の類型は、A型 (Average Type), B型 (Blast Type), C型 (Calm Type), D型 (Director Type), E型 (Escape Type) であり、典型として、A, B, C, D, E, 準型として、A', B', C', D', E', 混合型として、A'', AB, AC, AD, AEと、どれにも属さないF型の16の型に判別される。

また、テストを受けた被験者の性格の判定にあたっては、尺度レベル、因子レベル (尺度をいくつか組み合わせたもの)、プロフィールレベル (類型レベル) の3つのレベルを総合して判断するようになっている。それぞれの性格特徴については、Y-Gテスト用紙や製作元の竹井機器工業株式会社が出版している手引書やパンフレットに記載されているので省略する。

Y-Gテストの概略は以上のようなものであるが、筆者は過去6年間 (及びそれ以前の選択の心理学5年間と、明治鍼灸短期大学の1年間も加えられるが)、心理学の必修の授業の中で、Y-Gテストを必修要件として学生に施行してきた。そして前期末試験の代わりに、Y-Gテストの結果をもとにして、学生自身に自分の性格を自己分析せよという課題でレポートを書かせることを行ってきた。そこで、今まで行ってきたことのまとめとして、今回、どうして多くのテストの中でY-Gテスト

をとりあげたのか、また、それを施行し、レポートを書かせることの意義などについて考えてみるとともに、これまでのY-Gテストの結果の集積を分析して、本学学生の特徴、学生の性格傾向の推移などについて検討してみる。また、筆者の過去20年にわたる大学心理学教員として学生にY-Gテストを施行してきた経験から、Y-Gテスト手引書やパンフレットに書かれていない、各類型の筆者なりの新しい見方をまとめてみることにする。

本稿では次のような順序でY-Gテストの結果の資料を分析していく。

- (1) 多くのテストの中で、何故Y-Gテストをとりあげたのか、また、レポートを学生に書かせることの意義。
- (2) 過去6年間の学生のY-Gテスト結果の年度ごとの比較、学生の性格傾向の推移。
- (3) 女子学生のY-Gテストでの特徴。
- (4) 短期大学の時の学生の結果、選択心理学の時の学生の結果との比較。
- (5) 留年学生において、一年時のY-Gテストに何らかの特徴が見出されるか。
- (6) ?の解答の多い人をどう考えるか。
- (7) 反応歪曲について。
- (8) 過去20年間の経験から、筆者なりのY-Gテストの各類型の新しい見方。
- (9) Y-Gテストの結果から、学生の教育や指導に当たっての提言。

II 結果の資料及び整理の方法

Y-Gテストの結果の資料については、昭和63年度から平成5年度までの大学1年生、心理学必修課目受講者672名、(Y-Gテストを受けなかった者、提出しなかった者が数名存在する)。昭和59年度から昭和63年度までの、大学2年生、心理学選択課目の受講者のうち、Y-Gテストを受けた者98名、昭和58年度、短大2年生、臨床心理学必修課目受講者102名、の計872名のY-Gテストの結果を資料とする。Y-Gテストの実施時期は、7月の最初の週かまたは6月の最後の週である。

結果の整理については、各年度ごとにY-Gテストの12の尺度について、それぞれ平均値を算出して比較することとした。選択心理学では一年度の人数が少ないので、まとめて5年分を1グループとした。また、女子学生、留年学生については、6年間分、5年間分をそれぞれのグループとみなした。また、各尺度の平均値を比較する場合に、あえて、統計的有意差は算出しなかった。これは、差が少ないので統計的有意差自体があまり顕著にみられないだろうという予測からである。

Ⅲ 何故Y-Gテストをとりあげたのか、また、レポートを書かせる意義について。

心理学は文字どおり、心の理に関する学問である。人間の心に対する心理学的アプローチは大きくわけて二つの観点が考えられる。一つは、多くの人に共通の法則のようなもの（自然科学の法則のように論理的整合性はないかもしれないが）を調べる観点であり、もう一つは、個人の特徴、個性に焦点をあて、一人一人の特殊性、個人差を調べようとする観点である。前者の立場には、行動主義心理学があり、知覚心理学、社会心理学も当てあまる。後者の立場には、パーソナリティ心理学（性格心理学、知能心理学）があり、臨床心理学、差異心理学が当てはまる。発達心理学は両者の観点に立つが、前者の傾向が強いと思われる。

パーソナリティ心理学は、筆者の興味のある分野であり、知能、性格などの個人差を調べる領域であり、心理学の中で大きなウェイトを占めている。人間の性格を客観的にとらえようとする一つの方法として心理テストがあるが、現在、心理テストは非常に多くの種類のものが発行され、販売されている。その中でY-Gテストを代表的に選んだ理由として次のような点があげられる。

① 質問紙法心理テストはテストの仕組が簡単に理解できる。とくにY-Gテストはその構成が非常にわかり易い。Y-Gテストを構成している12の尺度のみでは、性格における重要な部分を見落していることも考えられるが、被験者のおおよその性格を知る為には充分である。また

他の質問紙法のテストと比較しても尺度どおしのバランスがとれていると思う。それゆえ学生が一番最初に出会う心理テストとして好ましいと言える。

- ② Y-Gテストは、多方面で非常に多く施行されてきた過去の実績がある代表的な心理テストであり、テストの信頼性や妥当性について多くの実証データがあり、心理テストとして一応のレベルを保っている。
- ③ テストの施行が容易である。集団法で実施ができ、不都合なことはあまりない。テストの所要時間が適当であり、また結果の整理のための所要時間も適当であるので、90分の授業時間内で行うには好都合である。さらに、内容の質問項目をテスターである教師が読みあげる代りに、あらかじめ吹きこんでおいたテープを使用することにより、テスターである教師の手間が省け、その分、もたついてやり方のわからない学生に個別に説明指導ができる。
- ④ テストの結果の性格判定については、資料を配布することにより各自学習でき、比較的簡単に済ませることができる。これについては、マニュアル通りの説明のみで、もの足りないという不満をもつ学生もかなりいる。
- ⑤ Y-Gテストは特性論の立場に立つテストであり、また類型論の立場にも立っている。後の心理学の授業の中で人格の章で、特性論や類型論の説明をするときに、具体的な例として、Y-Gテストを用いることができ好都合である。
- ⑥ 性格判定の際、情緒不安定という言葉はでてくるが、他の心理テストにみられるような精神病理学的用語（例えば、神経症傾向、うつ傾向など）はでてこない。最初に行う心理テストとして好ましい。
- ⑦ 自己評価法であるので、本人が自分をよく見せようと虚偽の応答をすることが可能である。これはY-Gテストの大きな欠点でもあるが、いやいやながらテストを受ける者にとって、一つの逃げ道を作っていることにもなる。また、結果に対して、自己評価法で評価した結果なの

で、他人が下した評価でなく、たとえ好ましくない結果が出てきたとしても結果を納得して受け入れ易い。とくに青年期の学生にとって、この点は大切なポイントである。

- ⑧ レポートを書かせることにより、自分のテスト結果をどう認知し対処するかを見ることができ、ただ単に判定結果を受動的に受けとるだけではなく、主体的にそれとどう係り対処するかということが求められるので、より自己認識が増すと考えられる。また、認知のし方はその後の行動のし方に影響を及ぼすので、たとえテスト結果が好ましくなっても、それに対する認知のし方が良い方向に向かって肯定的に受けとる者は、人格発達上好ましい方向に向かうと予測される。
- ⑨ 後述する結果に示されるように、現実問題として最近では外向性の学生が非常に多い。外向性の者は、誰とでもコミュニケーションを容易にとれるという点で医療従事者として好ましい点もあるが、内省力に欠けるという欠点もある。レポートを書かすことは、内省させるわけであ

るから、一度くらいレポートを書かせたから内省力が増すとは思えないが、外向性の者にとって、内省する学習をしないよりは、させる方がよいと思う。

IV 過去6年間の学生のY-Gテスト結果の年度ごとの比較、学生の性格傾向の推移。

過去6年間の各年度における大学1年生、ほぼ全員（数名欠ける）のY-Gテストの結果から、Y-Gテストを構成する12の尺度の粗点の平均値を示したのが表1である。また各年度における、A～Eの類型別の割合（％）を示したのが表2である。表1から傾向として言えることだが、最近の3年間（平成3年度～平成5年度）は、前の3年間と比べて、D尺度の得点が小さく、Co尺度の得点も小さく、RとA尺度では少し得点が大きくなっている。このことは、抑うつ的でなくなり、協調性が高くなり、のんきさと支配性が少し大きくなっている傾向が示されている。また表2より、A型は少し減少し、D型が増加していることがわかる。

表1. 過去6年間のY-Gテスト検査の結果・・・各年度ごとの12尺度の粗点の平均値

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
平成5年	9.46	9.88	8.23	8.85	8.40	6.85	11.00	11.88	12.73	10.06	11.41	13.88
平成4年	9.15	9.37	8.07	9.32	8.23	6.78	11.15	11.96	12.73	9.57	10.90	13.72
平成3年	8.65	8.76	6.79	8.38	7.95	6.92	11.53	12.14	12.45	9.49	11.75	14.69
平成2年	10.37	9.32	8.80	9.67	8.71	7.54	11.20	11.72	11.86	9.07	10.07	13.34
平成元年	8.81	9.34	7.55	7.95	7.87	6.73	11.14	12.06	12.57	10.54	10.80	13.83
昭和63年	10.63	10.73	8.71	9.85	8.49	7.76	11.92	11.61	12.30	8.57	10.59	13.46

表2. 過去6年間のY-Gテスト検査の結果……A~Eの5類型に占める人数と割合(%)

(注) 平成5年度は下記以外に、F型(A~Eのどの型にも属さない)1人を含む。

	A	B	C	D	E	合計
平成5年	17 (15.0)	31 (27.4)	10 (8.8)	44 (38.9)	10 (8.8)	113 (98.9)
平成4年	19 (17.1)	25 (22.5)	10 (9.0)	48 (43.2)	9 (8.1)	111 (99.9)
平成3年	15 (15.2)	18 (18.2)	7 (7.1)	51 (51.5)	8 (8.1)	99 (100.1)
平成2年	19 (16.7)	32 (28.1)	11 (9.6)	39 (34.2)	13 (11.4)	114 (100.0)
平成元年	29 (25.0)	25 (21.6)	12 (10.3)	45 (38.8)	5 (4.3)	116 (100.0)
昭和63年	27 (22.7)	32 (26.9)	7 (5.9)	39 (32.8)	14 (11.8)	119 (100.1)

表3. 過去6年間のY-Gテスト検査の結果……(B+D), (C+E), (A+C)の割合(%)とテスト未施行者、未提出者の人数

	B+D	C+E	A+C	未施行、未提出
平成5年	66.3	17.6	23.8	3人
平成4年	65.7	17.1	26.1	3人
平成3年	69.7	15.2	22.3	5人
平成2年	62.3	21.0	26.3	8人
平成元年	60.4	14.6	35.3	6人
昭和63年	59.7	17.7	28.6	6人

また表3は(B+D), (C+E), (A+C)の占める割合を示したものであるが、最近3年間の方が(B+D)の型、つまり外向性の人が増加し(A+C)の型、内向的で安定した人が減少している。外向性の人が増加しているのは、現在の日本社会の特徴と対応していると考えられる。すなわち、現在の日本社会では、環境からの強い刺激が与えられ易く、また、人々も自ら強い刺激を求め、逆に、静かさ、静寂を嫌い、また、集団や社会への適応が強く求められる。こうした社会状況へのある種の適応したものとも受とられるが、研究機関としての大学を考える場合には、読書や、一人で研究に専念するという内向的な性格が求められるわけで、この結果は大学にとって必ずしも好ましい現象とは言えないであろう。この傾向は多分、他大学に於ても同様にみられるのではないかと臆測される。しかしまた、尺度値に関しては、抑うつ的でなくなり、協調的になっている

表4. 過去6年間のY-Gテスト検査の結果……男女別の12尺度の粗点の平均値

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
女子	10.35	10.80	8.94	8.80	8.96	6.84	11.22	11.85	13.26	9.94	11.37	14.61
男子	9.26	9.18	7.76	9.09	8.05	7.20	11.36	11.90	12.16	9.41	10.90	13.52
全体	9.54	9.59	8.06	9.02	8.28	7.11	11.32	11.89	12.44	9.55	11.02	13.80

わけで、環境に対してより適応し易い傾向があるので、この結果は肯定的にも受けとめられる。

表3にはまた、未施行者、未提出者の人数が示してある。これはテストを施行しなかった者や、施行しても提出を拒んだ者の人数である。当日欠席してテストを受けられなくても、自分一人で家へ持ち帰って施行して提出することを是としているので、これらの者は、他者から自分のあり方が管理されることを嫌ったり、教師のやり方に反感を抱いている者と言うことが出来る。これらの人数は、最近3年間の方が減少していて、年次ごとに少なくなってきている。

V 女子学生のY-Gテストにおける特徴

表4には、過去6年間の大学1年生、男子502名、女子170名についてのY-Gテストの各尺度の粗点の平均値が示されてある。これから、D、C、I、R、Sの尺度に於て、粗点の平均値の差が1.00より大きいことがわかる。女子学生の方が、抑うつ的であり、気分の変化が激しく、劣等感がつよく、のん気で社交的である。

また、表4の値をY-Gテスト用紙に含まれているプロフィール欄に図示してみると図1のようになる。プロフィール欄のパーセンタイル表示は、1957年の標準化の際に、男女差を考慮して、男女



図1. 過去6年間のY-Gテスト検査の結果……男女別の12尺度の粗点の平均値。プロフィール表示

表 5. 大学必修心理 (過去 6 年間), 大学選択心理, 短大必修心理における,
Y-G検査の結果・・・12尺度の祖点の平均値

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
大学必修心 理 (672人)	9.54	9.59	8.06	9.02	8.28	7.11	11.32	11.89	12.44	9.55	11.02	13.80
大学選択心 理 (98人)	9.63	9.21	8.49	9.34	7.44	7.18	10.60	11.00	11.41	9.83	9.90	12.37
短大必修心 理 (102人)	9.61	9.97	7.77	9.47	8.09	7.49	12.28	11.30	12.03	9.71	10.38	13.35

表 6. 過去 6 年間の Y-G検査の結果・・・留年学生と非留年学生の比較・・・12尺度の祖点の平均値

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
留年 学生	11.06	10.23	8.15	9.25	9.50	8.75	12.17	10.77	12.98	9.56	10.06	13.25
非留年 学生	9.44	9.55	8.08	9.01	8.18	6.98	11.24	11.95	12.40	9.54	11.09	13.85
平均値 の差	1.62	0.68	0.07	0.24	1.32	1.77	0.93	1.18	0.58	0.02	1.03	0.60

別にプロフィール表示ができ、母集団全体の中での位置を知ることができるものである。現在の本学の学生については、女子学生の方が、のんきであり、非協調的であり、気分の変化が大きく、劣等感がつよく、社交的である。とくに、のんきさと非協調的な点については、男子学生との差が大きい。また、全体的にみて、女子学生の方が少し外向的であるといえる。

VI 短期大学の時の学生の結果、選択心理学の時の学生の結果との比較

昭和59年度から63年度に於ては、心理学は2年生の自由選択科目であった。受講者数は1学年につき約20名前後であったので、この間の受講者のY-Gテストの結果を、必修の授業で全員行ったY-Gテストの結果と、数量的に比較してもあまり意味がない。一応、Y-Gテストの12尺度の粗点の平均値を比較して示したのが表5である。表5より選択心理学の学生では、劣等感と神経質の粗点が少し高く、又、Ag, G, R, A, SのY-Gテストプロフィール欄の下半分の尺度で得点が低くなっていて、全体的に最近6年間の学生よりも内向的である。しかしこのことから、学生がだんだん外向的になってきているとは言えない。むしろ、心理学を選択して受講する者には内向的な学生が多いとみなした方がよいと思う。また、1年生と2年生における状況の違いも考えなければならない。

さらに、短期大学時の最後の年の2年生全員のY-Gテストの結果を、最近6年間の学生のY-Gテストの結果と比較したものも、表5に示してある。表5より、短大の学生の方が、最近6年間の学生よりも、回帰性傾向、神経質、非協調性において、粗点の平均値が少し高くなっている。また、攻撃性、思考的外向性の得点も少し高くなっている。最近6年間の学生の方が、攻撃的でなく、のんきで、神経質でなく、活動的、社交的であるという傾向がみられる。

VII 留年学生のY-Gテストにおける特徴

表6は過去6年間における留年学生（平成5年度入学の1年生は未だ留年学生はいないので、昭和63年度入学の1年生から平成4年度入学の1年生までの5年間の学生のうち、留年を経験している者）と、非留年学生（留年を経験しないで現在に至る者、あるいは、卒業した者）のY-Gテストの結果を、12尺度の粗点の平均値で比較して示したものである。留年学生の人数は48名で、男子43名、女子5名である。しかし、その他に留年学生であるが、Y-Gテストを未施行、未提出の者が8名いる。この8名という数は、表3に示した過去6年間の学生のうちの未施行、未提出者31名という数に対して約4分の1に当たり、割合としては非常に多いことになる。非留年学生は615名で、男子452名、女子163名であるが、その他に、未施行、未提出の者が23名いる。また、1年生のときにY-Gテストを受けていたが、途中で退学した者9名の結果は除外してある。

表6には両群の粗点の平均値の差が示してあるが、差が1.00以上の尺度をみると、D, O, Co, G, Aの5つの尺度で得点差がみられる。また、Agも差が1.00に近い。それゆえ、留年学生の方が、抑うつ的で、客観性に欠け、非協調的であり、活動的でなく、支配的でなく、また、攻撃性も少し高いといえる。言い方を変えれば、一人よがりで不満が多く、人を信用しない、あるいは、無力感にとらわれ易く、自ら主体的に問題解決行動をとろうとしないといった言い方が出来るかもしれない。これらの性格特徴は、留年したからこうなったのではなく、こうした性格傾向をもつ学生が留年し易いということである。ただ、差はわずかであるのでこの結果に対して過大評価はすべきではない。

また、これらの性格特徴をまとめて、社会性の発達の未熟さといった言い方も出来、大学という新しい環境に対する適応性のなさと言うことも出来るだろう。留年学生には、先に述べたように、未施行、未提出者が多いこともこのことと合致している。つまり、未施行者、とくに未提出者については、教師（筆者自身に対する場合も、教師一

般に対する場合をも含めて) に対する信頼感の欠如があるのではないかとまず考えられる。教師に対する信頼感の欠如は、モラル(やる気)の低下につながり、学校生活への不適応につながり易いからである。

表6には示していないが、A～Eの類型別に留年学生と非留年学生を比較してみると、留年学生48名については、A類型8名(16.7%)、B類型13名(27.1%)、C類型4名(8.3%)、D類型17名(35.4%)、E類型6名(12.5%)であった。非留年学生502名(昭和63年度1年生から平成4年度1年生までの5年間の学生について調べた)については、A類型100名(19.9%)、B類型117名(23.3%)、C類型43名(8.6%)、D類型200名(39.8%)、E類型42名(8.4%)であった。この結果から、留年学生において、とくにどの型の者が多くみられたとは言えない。ただ非常にわずかではあるが、B類型とE類型という2つの情緒不安定な型が留年学生において多くみられた。

Ⅷ ? (△) の解答の多い者について

? (△) の解答が多いことに対して、Y-Gテ

ストの手引書は何もふれていない。しかし、他の質問紙法のテスト、例えば、TEG, MAS, MMP I, などでは問題視、重要視している。TEGの手引き書³⁾は「この得点は抑圧的な、また防衛的な人では当然高くなることが多い。また、決断力に乏しい優柔不断な人でも高くなる。したがって、この尺度(Question Scale)は人格特徴を示す意味もある」と述べている。MASの手引き書⁴⁾は「多い場合は、一応、応答の信頼性を問題にしてよいであろう」と、MMP Iの手引き書⁵⁾は「多い場合は、他の臨床尺度の信頼性が乏しいものになる」と述べている。(MASはMMP Iから作られたものなので、同じ様な考えである)。

△の多さについて、どの程度の多さを問題としてとりあげたらよいかはわからない。過去6年間の学生672名についての結果からは、△が61より多い者(120の質問数に対して1/2より多い)は14名、△が41より多い者が(1/3より多い)118名みられた。14名の結果では人数が少ないので、この際、△が41より多い者118名をとりあげて考えてみることにする。

表7は△の多い者(41より多い)118名と、そ

表7. 過去6年間のY-G検査の結果……△の多い者とそうでない者の比較……12尺度の祖点の平均値

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
△の 多い者	10.98	9.91	9.30	10.31	8.90	8.18	11.05	10.94	11.36	8.63	9.91	12.42
多く ない者	9.23	9.53	7.79	8.75	8.15	6.88	11.38	12.09	12.67	9.74	11.25	14.09
平均値 の差	1.75	0.38	1.51	1.56	0.75	1.30	0.33	1.15	1.31	1.11	1.34	1.67

うでない者554名の両群のY-Gテストの12尺度の粗点の平均値を示したものである。表7より、両群の粗点の平均値の差が1.00以上の尺度をみると、D, I, N, Co, G, R, T, A, Sの9つの尺度で差がみられ、とくに差が、1.50以上の尺度は、D, I, N, Sの4尺度であった。もし、全ての質問に対して△で答えたとすると、完全なA型になるわけだから、現在の学生の平均プロフィールと比較すると、△の多い者は、プロフィールの上半分の6尺度では得点がより高くなり、プロフィールの下半分の6尺度では得点がより低くなるのは当然のことである。そこで、問題とすべきなのは、差の大きさということになり、両群の差が大きいD, I, N, Sの尺度をとりあげて考えると、△の多い者は、抑うつ的であり、劣等感がつよく、神経質であり、社交性に乏しいということになる。

また、表7には示していないが、両群のA～Eの類型別の割合をみると、△の多い者118名については、A類型41名(34.7%)、B類型29名(24.6%)、C類型7名(5.9%)、D類型27名(22.9%)、E類型14名(11.9%)であった。また△の多くない者554名については、A類型85名(15.3%)、B類型134名(24.2%)、C類型50名(9.0%)、D類型239名(43.1%)、E類型45名(8.1%)、F型1名(0.2%)であった。この結果から△の多い群でA類型が多いのは当然のことであるが、A類型の人数が増加した分だけ、他の4つの類型で均等な割合で減少していることにはなっていない。△の多い群でB類型は減少していないし、E類型においては4%近く増加している。それゆえに、△の多い群では、E類型とB類型の割合が多いということになる。

さらに△の多い者を年次別にみると、平成5年度は14名(12.4%)、平成4年度は15名(13.5%)、平成3年度は17名(17.2%)、平成2年度は29名(23.7%)、平成元年度は14名(12.1%)、昭和63年度は30名(25.2%)という結果であった。この結果は、表2に示された、平成2年度と昭和63年度において、B類型とE類型の情緒不安定な型が

非常に多かったのに対応している。

以上のようなことから、Y-Gテストにおいて△の答えが多いことは、あまり好ましいことではなく、情緒不安定や、神経症的傾向に結びつくような性格傾向を少し示すのではないかと思う。△の△の答が多いことは、“はい”も“いいえ”もどちらも当てはまり、性格の二面性を示すという解釈が一方ではできるが、他方では、どちらとも決められない優柔不断さ、判断力のなさ、また、自己概念のあいまいさや不確定さを示し、心理的には決して望ましいものとは言えない。

IX 反応歪曲について

Y-Gテストは前述したように、被験者が意図的に自分をよく見せようとして、質問に正直に答えずに、答えの評価を予想して社会的に望ましい答えをするようにすることが可能である。他の質問紙法テストでは、こうした被験者の応答態度を知るために、Lie Scale が設けられている。例えば、MPI, MAS, TEG, MMP Iなどのテストにはみられる。Y-GテストではこうしたLie Scaleを欠くので、被験者の応答態度を知ることが不可能であり、当然反応歪曲が生じ易くなっている。

Y-Gテストの手引き書¹⁾には、D型の中には、擬似D型(自分をよくみせようと応答して、本来D型ではないのにD型の結果が生じる場合をさす)が含まれる。その両者を鑑別することは難しいと述べてある。

しかしながら筆者の考えでは、擬似D型が生じ易いのは、Y-Gテストが入社試験などの一部として選抜のために用いられたり、他者からの人物評価の手段として用いられたりするような状況に於てであろうと思う。とくに利害と結びつかないようなテスト状況で施行された場合には、擬似D型はそれほど多くは生じないのではないかと考えている。ただ、学生を対象にして集団法で一斉に施行する場合、周囲の者に結果をみられることを意識した場合には、反応歪曲が生じることも考えられる。自分をよく知るために行うというテスト

状況では、反応歪曲は意図的ではなく、むしろ非意図的に自分でも気づかずに反応(答え)を良い方に変えてしまっているということが生ずるのではないかと思う。

また、外向性、内向性はそれぞれ、その人の基本的な特徴であって、とくに内向性の人は内省力が豊かであり、自分を厳しく観察し評価しようとする傾向が強いと思うので、内向性の人が自分をよく見せかけようとして反応歪曲が生じることは起こり難いと考えられる。つまり、E類型の人が反応歪曲をして、A類型やC類型、D類型の結果をうるとか、C類型の人が反応歪曲により、A類型やD類型の結果となることは生じ難いと考えられる。他方、外向性の人は、内省力が不十分であり、いいかげんに反応し易い。あるいは状況によれば、周囲の人の目を意識して、「変な結果が出たら嫌だ」などと思い、衝動的に反応歪曲をしてしまい易いのではないかと考えられる。それゆえに、テスト状況が利害にあまり関係のない状況でのY-Gテストにおいては、反応歪曲はB類型の者が擬似D型という結果になることが最も生じ易いのではないかと考えられる。

X 過去20年間の経験から、筆者なりのY-Gテストの類型の見方

筆者のおおよそ過去20年にわたる、Y-Gテストを大学生に施行してきた経験から、Y-Gテストの手引き書にのっている5類型の見方とは違った新しい見方を典型について以下に述べる。

○A型・・・手引き書¹⁾には、平均型、とくに取り立てて特徴のない型、平凡な人間で、とくに取り立てて各方面に良し悪しを示さないが、もし知能が低い時には、無気力で受動的な平凡な性格であると記載されている。A型は1957年の時の標準化によるものであり、現在では平均が以前よりも、情緒安定、外向性のD型傾向に寄っている。それ故に現時点でのA型は内向的な型であり、多少情緒不安定の要素も加わることになる。A型はまた、前述したように、△の?の反応が多い時に、A型類型の結果が生じ易くな

るので、△が多い場合のA型と、△の少ない場合のA型をわけて考える必要がある。△が少なくA型の場合は、内向的で、落ちついた、おとなしい性格であり、適度に社交的であるが、とくに目立たない性格だと言えよう。△が多い場合のA型は、防衛的な性格、優柔不断でことなかれ主義的な性格、あるいは情緒不安定なE型に近い性格と言えよう。

○C型・・・C型は手引き書には、安定消極型で良いこともしなければ悪いこともしない型、非行型であるB型と対極にある性格、積極性に乏しく、販売や渉外には不向きであると記載されている。筆者の見方では、C型は、A型よりも一層、おとなしく、消極的で、情緒が安定している性格であり、一人で行動するか、ごく少数の一人か二人の友人とのみつき合う型で群れて行動するのを嫌う。また、本などを読んで時間を過ごすのが好きで、ある意味では非常に大学生らしい型である。しかし自己主張を抑え、リーダーシップを発揮して多数の人を先導したりするのは苦手である。教師の側から言えば、扱い易くおとなしい型なので、大学生としてもっと増えてほしいと思うかもしれない。

○E型・・・E型は手引き書には、情緒不安定、社会的不適応、非活動的、消極的、内向的で性格の悪い面が内攻する型で内へこもり易い。この傾向が強くなると、無気力、受動的で絶えず悩みを抱き、ノイローゼになり易いと記載されている。筆者の見方では、Y-GテストのE型は、TEG(東大式エゴグラム)のAC優位型(他人に適応しようと努力する子供の要素が強いタイプ)に非常に近い性格だと思っている。つまり、他人の評価に非常に敏感で、他者から拒否されはしないかと、自分の気持ちを抑え、他人の意向に合わせようとする性格、別の言い方をすれば、ほめて欲しい、認めて欲しいという欲求の強い性格だと思う。それ故、E型の人は対人関係での欲求不満をもち易く、しばしば孤立したりし易い。知的に秀でている場合は、他者から認めてほしい、良い評価を得ようと、非常

に努力したりして、良い成績を上げたりするので、教師からみると勤勉な優等生であったりすることも多い。30代、40代の人でE型である場合は問題であるが、青年期という特別の発達の時期に於ては、悩んだり、情緒不安定であることはそれほど否定的にとらえなくてよいだろうし、きちんと登校を行い、内にこもらずにある程度の成績をあげている限りでは、E型といってもそれほど問題はないと思う。また、レポート書かせてみて、十分に自己を受容し、前向きに自分の性格の弱い面を受け入れ、対処しようとする人は、内省力の豊かさをもち、現実に関心を持ちながら、がんばろうとしているわけであり、大学生として好感のもてる場合が多い。

- B型……手引き書には、情緒不安定、社会的不適応、活動的、外向的で、性格の不均衡が外面に表われ、反社会的行動に出やすい、環境の不遇や知能が低いときは非行に向かい易いと記載されている。B型は筆者の見方では、一見、大人っぽく、しっかりしていて、てきぱきと行動をとり、明るく、くたたくのこない感じであるが、どこか芯のもろいところがある。甘えのような自己中心的な要素が行動の折々にみられたりする。寂しがり屋で積極的に他人とのコミュニケーションを求めて、人なつっこく、近づき易く、誰とでもすぐ友人になるような性格だと思う。大学生の場合は知能もよく、境遇にも恵まれているので、手引き書に記載されているような反社会的行動がみられるとは思わない。しかし、自分の気に入らないことがあると、ルールを破ったり、自分勝手な他者の都合を考えないような行動がかなり見られると言ってよいと思う。
- D型……D型は手引き書では、情緒的安定、社会的適応、または平均、活動的、積極的、外向的で、いわば性格の良い面が外部に表われ易い。このタイプの人は万事につけて良好な調和的適応的、安定的な行動をとり、一般に管理職として成功する人はこの型を示していることが多い。優れた管理者 Director のタイプでD型と名づ

けると記載されている。ここで間違っただけではないことは、D型の者が将来管理職になり易いという意味で受けとってしまうことである。つまり、A型の者でもB型の者でも、どの型の者でも、管理職になり、他人を管理、監督したり世話したりする立場になり、管理職として優秀な人は、当然D型の行動をとるわけであり、Y-GテストをすればD型の結果になると思われる。それゆえに、管理職の人にY-GテストをすればD型が多くみられるわけであり、Y-GテストのD型の人に管理職が多いということではない。ただ、他の型の人よりも比較的に管理職に向いていると言えるのではないかと思う。

筆者の見方では、D型は大きく分けて次の3つのタイプに分けられる。D型に属する3つの型をD₁、D₂、D₃型と区別してもよいと思う。

1つの型D₁は、いわゆる手引き書に記載されているD型の性格である。情緒が安定していて、積極的、外向的である。リーダーシップも適度あり、子供じみた様子でなく、しっかりした印象である。他者からみても、安心してみられるタイプである。

2つめの型D₂は、少し幼稚なタイプであり、内省力があまりなく、自分の性格は、明るく、積極的で良好な性格だと思いこんでいて、それ以上自己を厳しく見つめようとはしない性格である。それゆえに、別段、自分をごまかして反応歪曲をしてD型になったわけではなく、結構正直に答えているとみうけられる。この型の人には、心理テストを気軽に、遊び感覚でうけ、てきぱきと素早く解答して、早く終了したりする人が多い。多少子供っぽく、明るく、くたたくのこない、あまりものごとこだわらない性格で、困ったことがあっても要領よく乗り越えるようなスキル(skill)をもっている。そういう意味では非常に適応的な性格であるとも言える。

3つめの型D₃は、前述したような反応歪曲により擬似D型となった型である。しかしながら、必ずしも意図的に反応歪曲をして、自分を

よく見せかけようと答えたとも思われない。あまり深く考えずに、衝動的に答え、非意図的な反応歪曲が生じてD型の結果とな者が結構多いのではないと思う。それゆえに、この型は、B型に近い性格であり、多少の情緒不安定さがあり、外向的で積極的である。一見しっかりしたように見えるが、どこか芯の弱いところ、甘えの要素をもつ性格である。

XI Y-Gテストの結果から、学生の教育指導に 関しての提言

Y-Gテストは質問紙法のテストであり、被験者の性格の表面的なおおまかなものを知るためのものであり、Y-Gテストの結果のみから何かの提言をすることはあまり奨められるべきことではない。また、結果をあまり過大評価することは避けるべきことである。しかしながら結果は、明らかに、学生の実態の一つのデータではある。そこで、Y-Gテストを通しての学生に対する見方は、学生という対象に対する見方の一つの切断面でしかないことを念頭において意見を述べたいと思う。最近の学生の傾向として言えることは、表2、表3の結果に見られるように、B型やD型の外向性の学生が非常に多いことであり、また、少しずつ割合は増加する傾向にある。そこで外向性の人に対する教育指導のあり方について、少し述べてみることにする。

外向性の人 Eysenck, H. J.⁶⁾ によれば次のように述べられている。「典型的な外向性の人」は社交的で、会合が好きで、友達が多く、話し相手を必要とし、読書や研究をひとりですることを好まない。彼は刺激を求め、一か八かの冒険をし、過ちを犯しても大して気にかけないことが多く、そのときはずみで行動し、一般に衝動的な人である。彼はいたずら好きで、当意即妙に応答し、一般に変化を好む。気苦労がなく、イージーゴーイングで、楽観的で、笑い浮かれることが好きである。たえず身体を動かして物事を行なうことが好きで、攻撃的で腹をたてやすい。要するに彼の感情は十分に統制されておらず、必ずしも常に信

頼できる人間ではない。」

加えて、学内や教室でみられる外向性の学生の行動特徴をあげてみると、あきっぱい、長時間人の話をじっくり聞くのが好きでない、面白おかしく、わいわいおしゃべりしたり騒ぐのが好きである。シーンと静まりかえった静寂な状況で黙っていることが耐えにくい時がある。欲求不満があると行動に表わし易い。すなわち、不満があるとすぐ文句をいう、ずけずけ言う。すぐプイとどこかへ行ってしまふ。授業でわからなかったり、退屈すると、教師の気をひこうとしたり、目立つ行動をとったり、また教室から出ていく、ごまかしたり、その場しのぎの嘘をついたりするのがうまい。またルールを破ったりする。しかしそれに対して自責の念が乏しい。叱られたり、注意されたり、咎められたりしても、その場限りですぐ忘れてしまふ。などである。

こうした外向型の人が増加してきた状況に対して、どう対処したらよいのか考えてみると、一応、次のようなことが考えられる。

- ① 授業時間を短くする。とくに話を一方的に聞くような講義形態の場合、この点に関しては、大学の講義ということでは、一時間にある程度の内容を盛り込む必要があるもので、それほど短くは出来ないという反論があると思う。
- ② 通年講義の一年間に渡る講義の場合、いくつかのパートに分け、それぞれまとまった形でコンパクトにまとめて行う。この点についても授業科目によれば、そうしない方が良い場合もある。
- ③ 視聴覚教材などを用いて、授業に変化をつける。この点についても、最近ではテレビの番組などで、初心者向けの面白く構成された内容のものがあるので、学生のレベルに合わせて精選する必要がある。頭で考えるより行動する方が得意な外向性の人には、実験、実習、手作業のようなものは好んで行うと思える。しかし単調な作業が長時間続くと飽きっぽくなると思える。
- ④ 少人数教育、10人前後ぐらいのゼミ形式で、教師とのコミュニケーション、質疑応答ができ

る形式での授業を増やす。学生の一人一人に目がいきわたる人数にすれば、授業場面での欲求不満は少なくなると思う。

以上のように考えられるが、問題を外向性という点だけから考えているわけであり、なかなか自信をもってこうすればよいと明確には言い難い。また、全ての学生が外向性ではなく、3分の1ぐらいの学生は内向型といえるので、そのことも考慮しなければならない。さらに、強制的外向型(forced extroversion)といって、本来は内向型であるのに、社会文化的、環境的要因によって、やむなく外向型の行動をしているタイプという考えもあるので、上記の提言は参考意見として付け加えたということになる。

文 献

- 1) 辻岡美延：新性格検査法…Y-G性格検査実施応用研究手引。日本心理テスト研究所、奈良、pp4～9, 18～40, 1982.
- 2) 岡堂哲雄編：心理検査学…心理アセスメントの基本、垣内出版、東京、pp269～281, 1975.
- 3) 石川 中ら：TEG(東大式エコグラム)手引、金子書房、東京、1984.
- 4) Taylor, J. A., 阿部満州、高石 昇：MAS(顕在性不安検査)使用手引、三京房、京都、1985.
- 5) 日本MMPI研究会編：Minnesota Multiphasic Personality Inventory マニュアル、三京房、京都、1976.
- 6) Eysenck, H. J.: Fact and Fiction in Psychology, Penguin Books Ltd., England, 1965. 岩脇三良 訳：心理学における事実と虚構、第2刷、誠信書房、東京、p57, 1973.

Results of the Yatabe-Guilford Personality Inventory in the Students of the Meiji College of Oriental Medicine

TADA Kenji

Department of the Humanities, Meiji College of Oriental Medicine.

Summary: The results of the Yatabe-Guilford Personality Inventory, a test which has been given to the freshmen of the Meiji College of Oriental Medicine for the past six years, were analyzed. The characteristics of personality, changes of personality in the student group as a whole, the characteristics of personality among women students, the characteristics of personality of repeaters and of students with many doubtful answers, were examined. The result was that the percentages of extroverted types such as B-type or D-type in the Y-G test has been gradually increasing, as a whole, year after year. Moreover, from my experience in the past twenty years, a new perspective on the five personality types of Y-G test is presented.